

幼稚園教諭・保育士養成課程における

ピアノ奏法理解への一考察

—ピアノ奏法基本のアンケートを基に—

A Study on the Piano Playing Method Applied to Early Childhood Education Programs for Teachers —Based on a Survey of Basic Piano Playing Method—

秋元彩佳
Sayaka AKIMOTO

はじめに

教育・保育の現場では、子どもに対して音楽を取り入れた活動が多い。それは、音楽の多様な側面を通して発達を促し、感性を育み、情緒の安定をもたらすという、子どもの成長にとって非常に重要な部分を担うからであろう。保育所保育指針では第2章 保育の内容 1. 乳児保育に関わるねらい及び内容 (2)ねらい及び内容 ウ 身近なものに関わり感性が育つ (イ)内容 ②生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。⑤保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。 2. 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容 (2)ねらい及び内容 オ 表現 (イ)内容 ②音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。④歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。 3. 3歳児以上の保育に関するねらい及び内容 (2)ねらい及び内容 オ 表現 (イ)内容 ④感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。⑥音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。と記されており、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様である。幼稚園教育要領においても保育所保育指針3. 3歳児以上の保育に関するねらい及び内容と同じ内容が記されている。実際、教育・保育の現場においては上記の内容だけに留まらず、音楽は他の領域とも密接に関わり合いながら用いられることが多く、そのような観点からも必要不可欠な活動と言えるだろう。

そして、教育・保育の現場においての音楽活動を指導するための基礎知識と技術を修得すべく、幼稚園教諭・保育士養成課程に在籍する学生は日々学んでいるところではあるが、特にピアノ演奏技術においては一朝一夕で修得できるものではなく、ピアノ演奏に馴染みのな

い学生は日々の練習に苦勞し、苦手意識が拭えないというのが実情であろう。このようなピアノ演奏技術の修得に苦勞している学生は勿論のこと、演奏経験のある学生にとっても、ピアノを演奏する上でどのような奏法の理解が不十分であるかを明確にすることにより、学生はねらいをもって練習に取り組むことができ、教員はそれぞれの学生の課題点に応じたより適切な指導が可能となるだろう。本稿はそのための一考察である。

ピアノ演奏に関する授業の本学の現状

本学の幼児・児童教育学科幼児保育コースに在籍する学生は、幼稚園教諭免許状（二種）、保育士資格取得の必修科目として、1年次にピアノ実技Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）を受講している。ピアノ演奏を入学試験に課していない本学において、学生が個々に持つ技術には個人差があり、その幅も大きい。それ故に個別指導という授業形態を定め、効率的に学びを深められるように体制を整えてきたところである。

例年ピアノ演奏初心者が多い実状（初心者への指導については「教員・保育士養成課程における初心者へのピアノ実技指導における一考察」（2019）において既に検討している。）ではあるが、その中でも仔細に音楽経験等のヒアリングを行い、初級・中級・上級というグループ分けをし、各グループの担当教員を決め、各教員は担当グループ学生を個別に巡回し指導している。グループ分けの基準は、全くピアノを弾いたことがなく、読譜ができない学生を初級、期間の長短に関わらずピアノの指導を受けたことがある、もしくは何らかの音楽経験（吹奏楽や軽音楽などのピアノ以外の楽器演奏等を含む）がある学生を中級や上級としている。しかし、近年はピアノ演奏初心者の数が増加しており、ピアノを習ったことがなく、音楽経験もあるわけではないが〈右手で簡単なメロディーが弾ける、または弾いたことがある〉や〈ト音記号の音がわかる〉程度の限りなく初級グループに近い学生が中級グループに入ることも少なくない。

練習環境については、自宅に鍵盤楽器を用意している学生がほとんどであるが、学内にもピアノ練習室（個室）が完備されており開学時間内であれば自由に練習ができる（2020～2022年度はコロナ禍により制限、または一部制限あり）ため、練習をすることに不自由はない環境と言えるだろう。しかし、学生の実際の練習状況としては、ピアノ演奏が好きな学生や自分の現状に危機感を抱いている学生は事前に練習をして授業に出席する一方で、全く練習をせずに授業日を迎える学生も少なくない。これは進度や技術の定着に差が付く一因と言えるだろう。

ピアノ奏法基本のアンケートの概要

ピアノ奏法基本のアンケートは、中級と上級グループ学生を対象に前期授業開始時、前期授業終了時、後期授業終了時にそれぞれの練習個室で回答するという方式で実施し、ピアノ奏法の基本的事項の理解度を調査しているものである。本稿では2019年～2022年の4年間のアンケート結果を基に学生のピアノ奏法理解の進捗を計り、より効率が良く学びやすい指導方法を考察する。

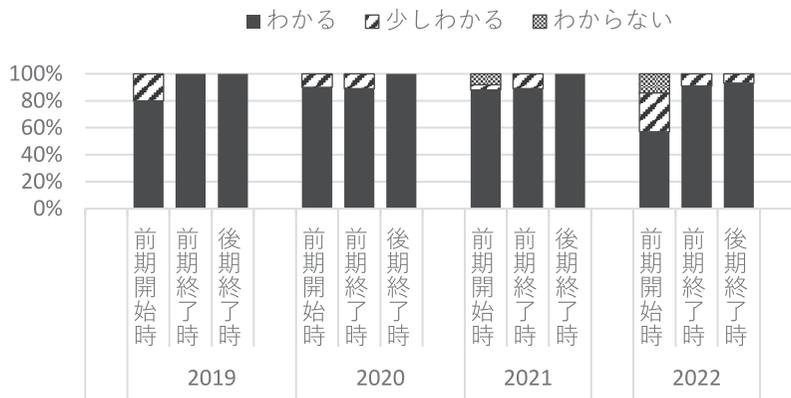
アンケート（資料1）内の〔わかる〕〔少しわかる〕〔わからない〕という回答の選択は学生の個人的な感覚によるところもあるが、〔わかる〕ということは、明確に設問の意味を理解し実際にピアノで弾いたことがある、もしくは練習したことがある、〔少しわかる〕は〔わかる〕よりも明確に理解しているとは言えないがおおよその意味を理解できている、〔わからない〕は設問の意味がわからない、もしくは設問にある単語を聞いたことがないという前提での回答と理解し考察を進める。

資料1

音楽基礎 ピアノ奏法基本のアンケート 前期開始 前期終了 後期終了			
幼児・児童教育学科1年幼保コース/児童教育コース		番 名前	
◆次の質問に答えてください。			
①ト音記号	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
②ヘ音記号	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
③階名	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
④音符	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑤休符	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑥音符と休符の関係	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑦拍子記号	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑧臨時記号	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑨強弱記号	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑩速度記号	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑪曲想記号	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑫#の調性	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑬♭の調性	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑭左右の交差	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑮同音連打	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない
⑯裝飾音符	<input type="checkbox"/> わかる	<input type="checkbox"/> 少しわかる	<input type="checkbox"/> わからない

各設問における考察

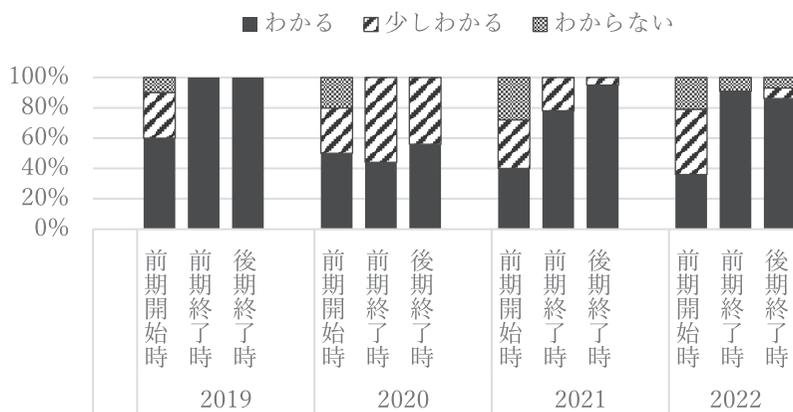
① ト音記号



ト音記号においては前期開始時で「わかる」「少しわかる」の割合が多く、いずれの年度においても前期終了時には「わからない」と回答する学生はおらず、ト音記号の理解については問題無いと考えて良いだろう。教本として使用している標準バイエル教則本は54番までト音記号のみで書かれているため、早い時期にト音記号を理解するに至っていると考えられる。

しかしこの設問の表現の場合、かたちを見てそれがト音記号だとわかるかと問われているのか、ト音記号の意味するところを問われているのか、ト音記号が正しく書けるか、ト音記号で書かれた楽譜が読めるか、またはそれら全部について理解しているかということなのか、学生によって捉え方が異なっていた可能性も考えられる。そこで、③に階名という設問があることを考慮し、この設問ではそれがト音記号だとわかること、そしてト音記号が正しく書けるかということを問いとし、明快に回答できるよう設問の表現の変更を検討する。

② ヘ音記号

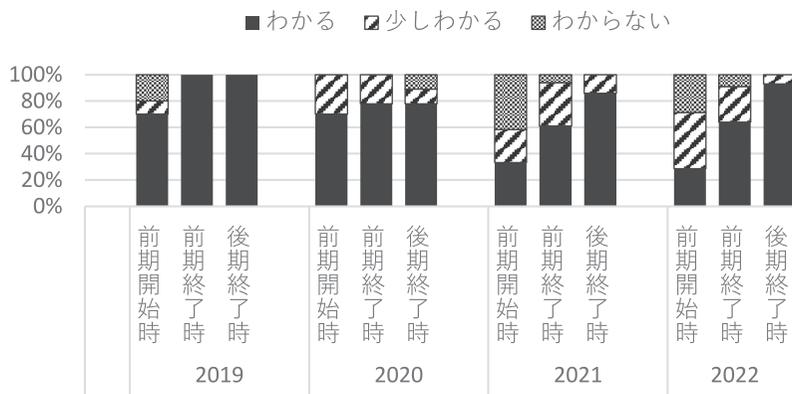


ヘ音記号においては例年、前期開始時に「わからない」と回答する学生が約10～30%おり、ト音記号に比べて接する機会が少なかったことがわかる。

前期終了時にはほとんどの学生が「わかる」「少しわかる」と回答していることから、学生全体の理解進度が遅いとまでは言えないが、完全に理解したと言えるほどは自信を持ってない状態のまま前期終了や後期終了を迎える学生が少なくないということであろう。これは①ト音記号での考察とも関連するが、使用している教本の標準バイエル教則本では54番までト音記号のみで書かれており、ヘ音記号の読譜は55番以降に開始することになるため、ヘ音記号に接する機会がト音記号よりもかなり遅くなることが理由のひとつと考えられる。その他にも、設問の意味を①ト音記号の場合と同様に色々なパターンでの捉え方がされていることも一因であろう。その中でもヘ音記号の読譜ができるかと問われていると捉えている場合、ピアノの演奏経験が浅い学生にとって、前期終了時まで55番以降へ進み、尚且つヘ音記号の読譜がスムーズにできるようになるということはハードルが高いことであり、「わかる」との回答に至らないことは想像に難くない。①ト音記号と同様にそれがヘ音記号だとわかること、ヘ音記号が正しく書けるかという設問の意図が確実に学生に伝わるよう表現の変更を検討する。

いずれにしてもヘ音記号はピアノの楽譜を読むということにおける基礎となる要素であるため、もう少し早い時期からヘ音記号の読譜を開始できるよう、標準バイエル教則本以外の教本からの抜粋使用、あるいは楽譜ではなく楽典用教材の使用も検討していかなければならないと考える。

③ 階名

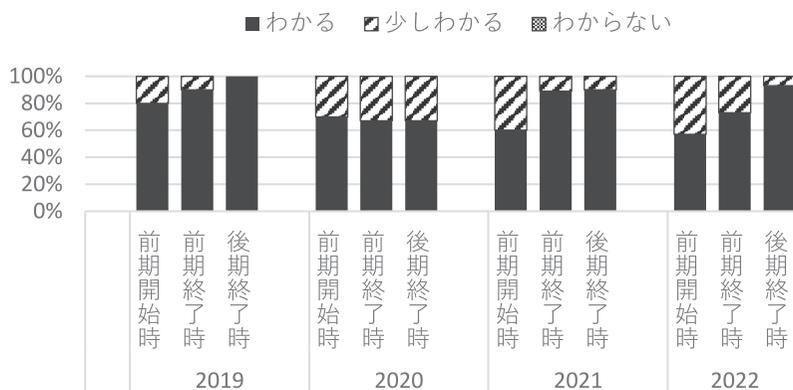


階名とは音の高さということであり、この設問は五線上の音符がト音記号の場合とヘ音記号の場合に何の音なのか（ドなのか、ミなのか等）がわかるかを問うものである。

2021年から「わかる」と回答する学生が急激に減っている。これはほぼ初心者という学生が増えていることが考えられる。このほぼ初心者という学生は、少しなら鍵盤を弾いたことがある、またはなにかしらの楽器を弾いたことはあるが楽譜は読めないという場合が多く、いわゆる耳コピでの演奏やギター等のコードなら演奏できるというものである。しかしながら、ほぼ初心者という彼らではあるが、読譜する上での仕組みや考え方を理解することによって読譜へ前向きに取り組む姿勢が見られ、慣れるまでに多くの時間は要さないことがほとんどである。後期終了時には「わからない」と回答する学生はほぼいなくなることから理解進度としては決して悪くはないと考える。

また、読譜経験が浅い学生には慣れるまで階名（ドレミ等）を楽譜に書き込み、段階的に書き込みを減らしていくという指導方法で最終的にはほぼ書き込み無しで読譜できるようになっているため、この指導方法を継続する。

④ 音符



この設問が問いたい内容は、音符の種類とそれぞれの表す長さがわかるかということである。

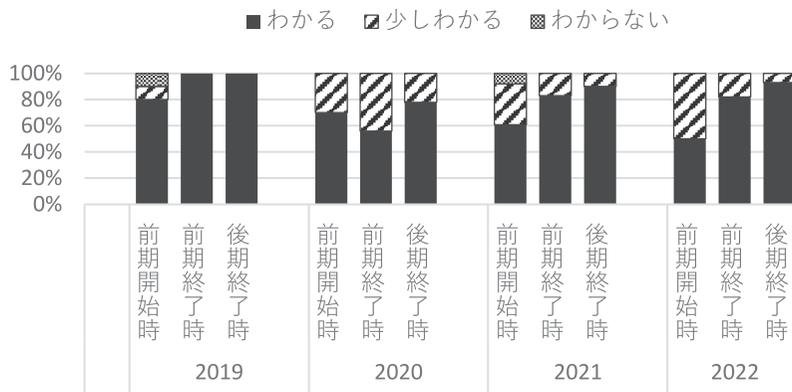
前期開始時点ですでに〔わかる〕〔少しわかる〕と回答する学生が多く、後期になると〔わかる〕という学生が増えることから理解進度については問題無いと言える。

個別指導の際にこれまでに習得していない新たな音符については説明すると共に、すでに理解しているはずであろう音符についてもこの音符は何分音符で何拍伸ばすかというような質問を適宜するなどの指導により、音符の名前と長さの理解の定着を図ることを継続していく。

音符の表す長さというのは楽譜を読み演奏する上では最も基本的な要素であり、ほぼ初心者とは言え何らかの音楽経験を持つ中・上級グループの学生においてはわかっていて当たり前のことと考えることもできる。しかし、通年で〔少しわかる〕と回答する学生も一定数おり、100%の学生が〔わかる〕と回答できない理由として、基本的な音符の種類はわかっているがそれで全種類ということではないと知っている、あるいは複付点や32分音符などの細かい長さが含まれる音符についてはなんとなく知っている程度でまだ実際に演奏したことがない、またはそれぞれの音符の長さそのものはわかっているがそれぞれが組み合わせられたものの理解や演奏となると自信が無いといったことが考えられる。このように考えてしまうと〔わかる〕とは回答しづらくなるだろう。

この設問は、標準バイエル教則本102番までに出てくる音符の種類を理解していることが〔わかる〕とする基準と考えているため、設問に《全音符・2分・4分・8分・16分音符、付点、複付点》などと具体的な音符の種類を明記することを検討する。

⑤ 休符

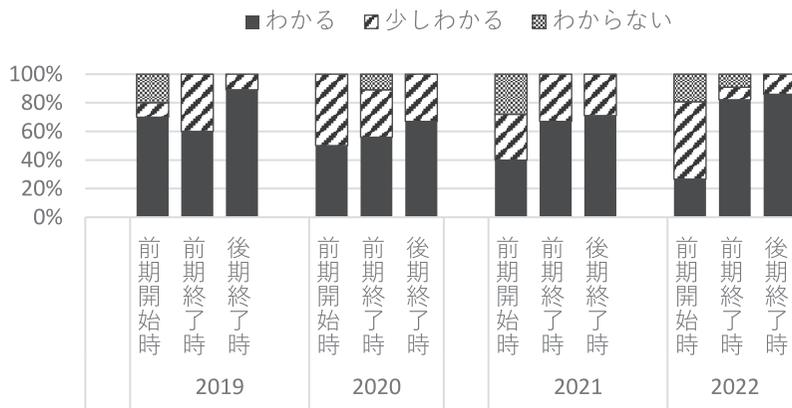


設問内容は休符の種類とそれぞれが表す長さがわかるかということである。

④音符とはほぼ同じ理解進度と捉えることができ、特筆すべき課題は無いが、④音符と同様に具体的な休符の種類を明記することは検討する必要があるだろう。

また、休符においては、読譜が一定程度できる学生であっても見落としやすく、記譜されていないものとして演奏する（休符を直前の音符として捉え、長く伸ばしている）学生が少なくない。日頃から休符を意識して聴く、読譜するということが少なく、読譜の際の注意事項としての認識が足りていない様子が見られるため、休符についての理解度を上げることはもとより、読譜時の見落としにも注意をして指導していきたい。

⑥ 音符と休符の関係



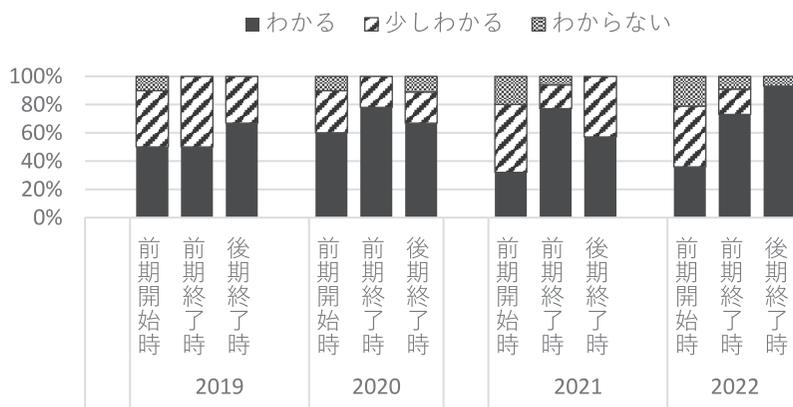
この設問が問うのは音符と休符の相関関係がわかっているかということであり、これは④音符と⑤休符について理解していることが条件となる。〔わかる〕と回答する学生は④音符

⑤休符の「わかる」と同じように推移しており、最終的に「わからない」と回答する学生も見られないため、理解進度としては問題無いだろう。

しかし、④音符や⑤休符よりも「わからない」と回答する学生が多いことは懸念される点である。⑤休符にて考察した通り、休符を無いものとして読譜してしまう学生も多く、音符と休符の長さを逐一考えて読譜をするということが定着しておらず、そのため、この設問で何を問われているのかわからなかったということがあるのではないだろうか。音符と休符の関係を含めての読譜というのは、ピアノや楽器のレッスンを受けてきた学生以外は苦手である場合が多く、読譜が少しできる場合でも勘違いや大雑把な予想の元で進めてしまうことが多々あり、そうしてしまうと左右それぞれの楽譜の辻褃が合わなくなり、演奏した時に破綻を起こしてしまう。そして、やはりできない、わからないなどと苦手意識を増長させてしまう可能性すら考えられる。そのような事態を引き起こさないためにも、読譜の際の手順をよく説明し、わからないところは質問するよう促し、読譜に不十分さを感じられる場合には、小節内を細かく分けて考えることで整理するなどの具体的な指導をしていく必要があると考えている。

また、設問の内容自体が理解しにくいことも「わからない」と回答する理由のひとつとも考えられる。設問を端的に、わかりやすく言い換える、あるいはアンケート時に補足説明するなどの検討も必要だろう。

⑦ 拍子記号



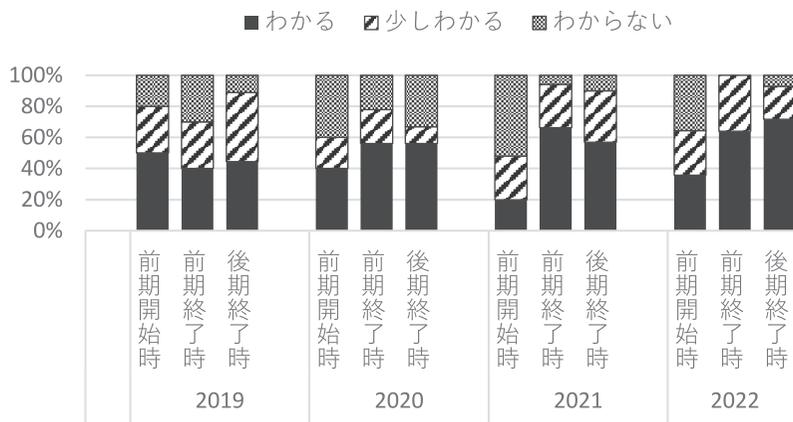
この設問では拍子の種類とそれが表す意味がわかるかということを問うている。

2020年と2021年は前期終了時よりも後期終了時の方が「わかる」と回答する学生が減っている。この事象について、前期授業内での標準バイエル教則本課題曲の学修である程度理解

していたつもりであったが、後期授業の課題曲で学修を深めるにつれ、まだ自分が知らない拍子があると知った、またはそのような拍子があるのだろうと想像ができるという理由から〔わかる〕とは回答できないと考えた学生がいたからではないかと考えている。さらに、2019年～2021年までの後期終了時に〔わかる〕と回答した学生が70%に満たないということからも、拍子についての理解進捗が良いとは決して言えない状況であった。

そのような状況を受け、2022年には新しい課題に進む際には拍子の確認とその拍子の考え方を説明するようにしたところ、93%が最終的には〔わかる〕と回答しているため一定の効果があったと考えるが、〔わからない〕と回答している学生がまだ少なからずいることもあり、理解が進まない学生には拍子に関する指導の時間を多めに配分するなどの指導の工夫が必要だと考えられる。

⑧ 臨時記号



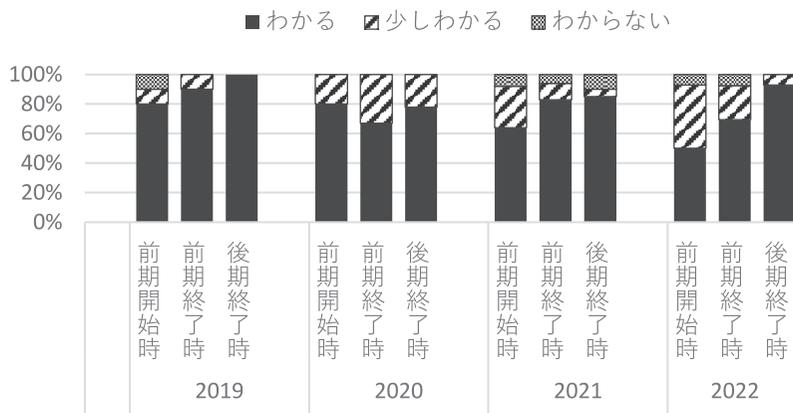
臨時記号について、〔わかる〕と回答する学生が次期のアンケート時に減少する、あるいは〔わからない〕と回答する学生が増加するという事象が起きている。⑦拍子記号の場合と同様に、わかっていたのではなく、わかっていたつもりだったことに気付いた学生がいたと考えることができるだろう。

臨時記号は標準音楽辞典において 楽曲の途中で、一つの音の高さを一時的に変える記号。種々の変化記号や本位記号が用いられる。同一小節内に臨時記号のある同名の音が2つ以上現れるときには、最初の音だけ臨時記号をつける。位置の異なる同名の音の時には、臨時記号を反復してつけることが多い。(標準音楽辞典 1966第5刷1983) と記されており、調号としての変位記号などとは違うものであるが、その種類と意味において前期授業開始時から完全に理解している学生は少ない。よくある間違いとして、臨時記号は変位記号と

同義だと思っている、もしくはその有効性の及ぶ範囲についてなどが挙げられる。標準バイエル教則本80番以降に臨時記号が付き始めるわけだが、読譜の間違いを教員から指導されて初めて臨時記号の意味を実感することとなる学生が多数見られる。また、一度臨時記号についての指導や説明をしても、少し期間が空いてしまうと意味を忘れてしまい、課題曲毎に読譜を間違えてしまう学生も少なからず見られ、アンケート結果と照らし合わせても、臨時記号の理解進度（定着と言ってもいいかもしれない）は良好とは言えないと考えるべきだろう。

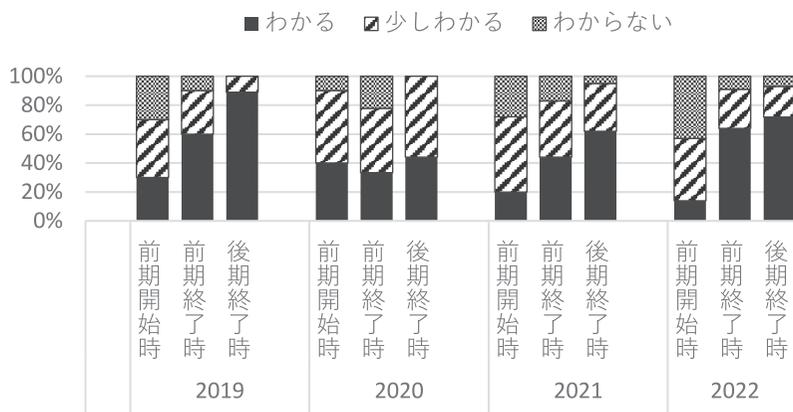
意味としての理解を最初に目指すのは必須であるが、その後にある程度の回数の読譜練習をすることで臨時記号の理解の定着を図ることができるのではないかと考える。ピアノ実技授業において臨時記号が付いた課題曲に取り組む際に、課題曲以外の曲（少し先に取り組む予定の課題曲等）の臨時記号部分のみの読譜練習を取り入れることなどができよう。また、音楽理論の授業においても臨時記号の読譜課題を取り入れることも検討したい。

⑨ 強弱記号



強弱記号についてはすでに修得している学生がほとんどである。少なくともフォルテ (f) やピアノ (p) くらいは理解しており、それらも全く知らないという学生はごく少数である。[わからない] と回答する中・上級グループにおいては特に、強弱記号について全く知らないという学生がいるとは考えにくく、[わからない] と回答したのは、全ての強弱記号を理解しているわけではないからとの理由が十分に考えられる。もちろんフォルテやピアノという名称は知っていても、それが強弱を表す記号だと知らない学生も少数いるだろう。しかし、記号と名称、そして意味は非常にわかりやすいため、一度でも説明や指導を受ければ理解はスムーズに進むと考えている。

⑩ 速度記号

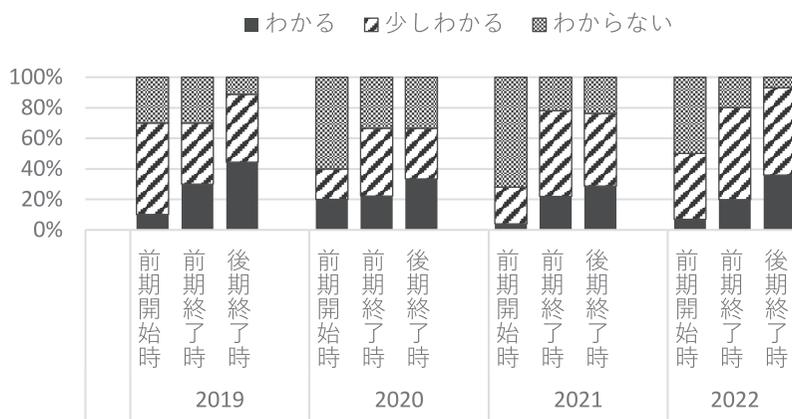


この設問は速度を表す標語も含めて速度記号と表記している。記号の場合♩=60となり、標語はAndanteなどの言葉での表記となる。

アンケートでは前期開始時点で「わかる」と回答する学生は非常に少ない。「わからない」と回答する学生が多く、そもそも速度を指示する記号があることを知らないと考えられる。例年「少しわかる」と回答する学生が一定の割合でいるのは、それまでの音楽経験上から習得したのがあると考えられるが、「わかる」との回答に至らない理由については、自分がまだ知らない記号や標語があるとわかっているからであろう。

理解進度としては順調に進んでいるように見えるが、後期終了時に「わかる」や「少しわかる」と回答する学生が多くなるが、2021年、2022年には「わからない」と回答している学生もいることから、指導の見直しを検討する必要があると考える。まずは前期授業開始時から音部記号や階名、音符などの基本的な事項の修得を目指した上で、楽譜にはModeratoやAllegrettoなどの標語の表記があることや、速度について指示する記号があることにも着目するよう指導を行う。一定程度の理解がある学生には、課題曲毎に速度の指示に合うように弾く、またはその時点で自分が練習している速度を記号や標語で表すといった実践を通して速度記号の修得に繋げたい。

⑪ 曲想記号

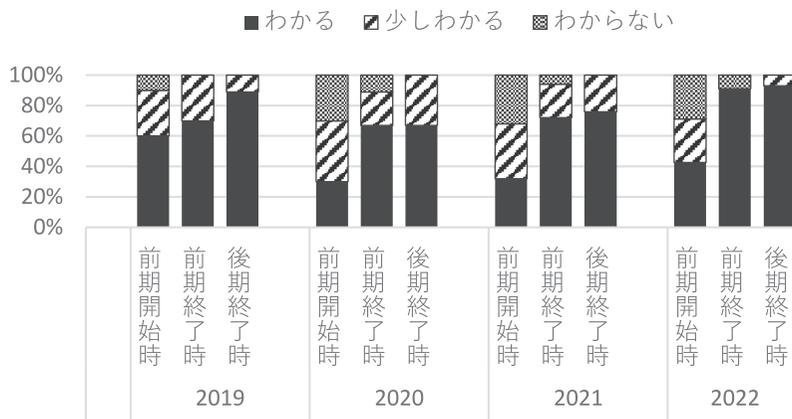


曲想とは、曲やその一部の性格や表情ということであり、楽譜上に記号で表記されるものではなく言葉を用いて表すため、曲想標語とも言う。設問を記号と表記しているのは、その他の設問と合わせ理解しやすいようにという配慮であったが、実際のところを考えると「曲想標語」とした方がより明確に伝わる可能性が高いため、設問表記の変更を検討する。

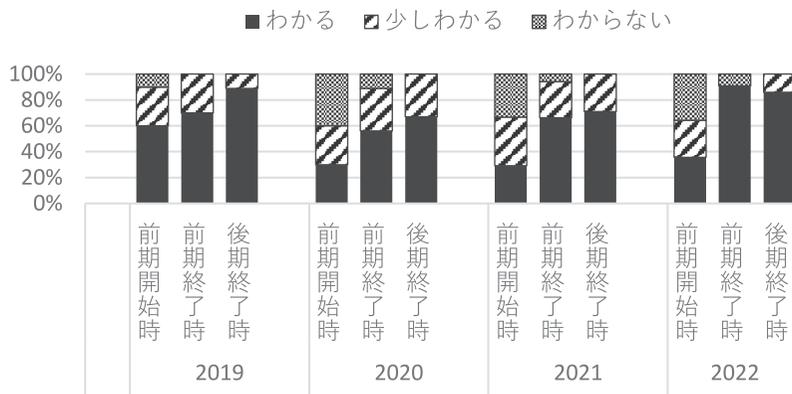
曲想については最も理解されてこなかったことがアンケート結果からわかる。前期開始時点で「わからない」と回答する学生が全設問中で最多であり、後期終了時においても「わかる」と回答する学生は少ない。この結果について考察する際に、まず、本来であれば曲想を表す標語の意味がわかり、さらにその標語が示すものを表現する（弾く）ということを最終的な理解の到達点として目指すところではあるが、現状は五線上に書かれた様々なことを理解し、弾けるようになることが優先であり、また、標準バイエル教則本における曲想標語はdolce以外では見当たらず、これでは曲想についての修得は困難と言わざるを得ないだろう。しかし、そのような中であっても、教育者・保育者を目指す学生にとって、曲想について知り、それをどのように表現するのかを考えることは、保育要領等にもあるように子どもの自己表現を受容し、様々な表現の仕方に親しんだり、子どもの表現しようとする意欲を十分に発揮させることができるような配慮をする上で疎かにしてはいけない点である。

よって、曲想標語の取扱いがある音楽理論の授業と連動させ、最低でも後期の開講であるピアノ実技Ⅱにおいて、課題曲をどのように感じ、音楽理論で学んだ曲想標語を付けるとすれば何を選択し、どのように表現するのかを担当教員と探究し学びを深めていくことを検討したい。

⑫ 井の調性



⑬ bの調性



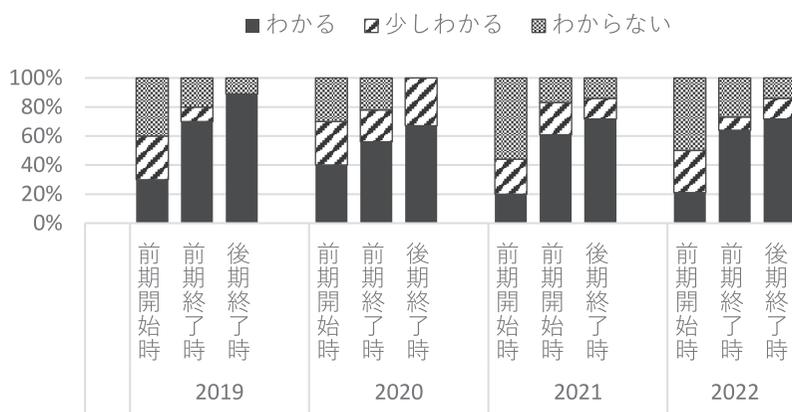
井の調性とはト長調やニ長調をはじめとする、調号としてシャープ記号が付く調性のことであり、bの調性はフラット記号が調号として付く調性のことである。ここで問うているのは、調号としてシャープやフラットが付いた場合にどのように弾かなければならないかということに加え、シャープがひとつ付いた場合には何調なのか、フラットがひとつの場合は何調なのかということを理解しているかということである。

⑫⑬の回答の推移についてはほぼ同じであった。前期開始時点では〔わからない〕学生も多々いるが前期終了時にはそのような学生は大幅に減る傾向にある。これは、標準バイエル教則本70番から調号のついた曲が取り扱われ始め、前期終了までには70番以降に取り組む学生が多く、その際には必ず調号やその意味などの説明を受けていることに加え、音楽理論の授業が前期に行われており、そこで調性の意味や仕組みなどを学んでいるからというのも理由のひとつと考えられる。そして、遅くとも後期終了時には全員が標準バイエル教則本70番

以降の課題に取り組むため〔わからない〕と回答する学生はいなくなる。94番からのフラットの調性の課題曲まで進めなかった学生であっても、音楽理論として＃の調性もbの調性も意味するところや仕組みは同じだと理解しているため〔わからない〕学生がいないということだろう。

考え方+実践＝音楽理論の授業+ピアノ実技というかたちで学ぶことが理解の進度を上げることに繋がっていると考えられる。

⑭ 左右の交差

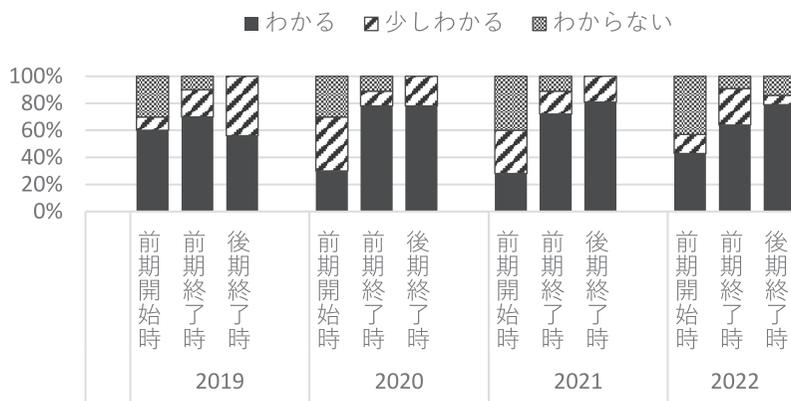


通常、ピアノを弾く際には左手が低い音域を、右手が高い音域を弾くが、時々、右手が左手の音よりも低い音域を弾くことや、またはその逆が楽譜に書かれることがある。そのような場合には左右の手（腕）を交差させて弾くこととなり、これが左右の交差という奏法である。

これは実際にこの奏法を使用する曲を自分で演奏した、もしくは他人がそのように演奏しているのを見たことがある場合でなければ〔わからない〕という回答となるだろう。アンケート結果を見ると、前期開始時には〔わからない〕との回答が多い。そもそもピアノを演奏する上で手が交差することがあるということを知らない学生が多いのだが、前期終了時、後期終了時には確実に〔わからない〕という学生は減っているところを見ると、実際に自分が標準バイエル教則本80番を弾いて理解をしたということで間違いないだろう。指導の方向性としてはこれで良いと考えるが、後期終了時までには80番に到達できない学生の場合、このようなピアノ奏法があることを知らないままということになってしまうが、それは避けたい。なぜなら、左右の交差が必要な楽譜を初めて読譜する際に、どのように弾けば良いのかわからず混乱する学生が例年少なからずいるからである。授業終了日までに80番に到達でき

ないだろうと判断される学生には、このような楽譜の書き方がされている場合には、左右の交差という奏法を用いれば弾くことができるということを、楽譜例を示して説明しておく必要があるだろう。

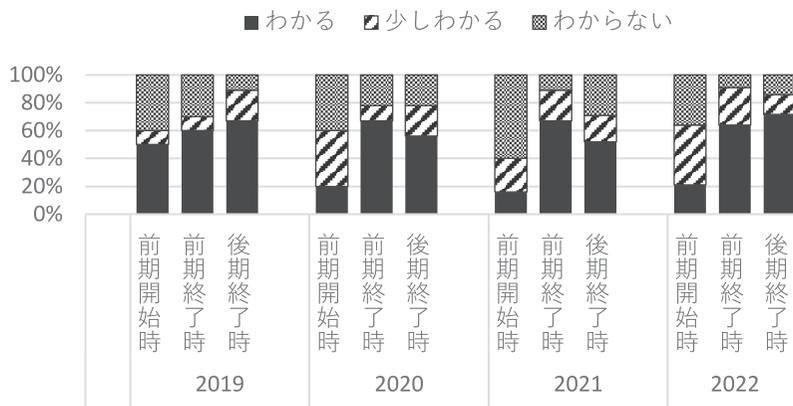
⑮ 同音連打



同音連打とは、同じ音を続けて何度か弾くということである。その際、毎度違う指を使って弾くという原則がある。ソソソソとソを4回連打する場合、指番号は4→3→2→1といった具合に弾く。

標準バイエル教則本においてこの奏法を実際に使用して弾くのは72番や74番以降である。前期開始時点では「わからない」と回答する学生が30～40%いるが、前期中にそれらの課題曲で奏法を理解し練習することで前期終了時には10%ほどに減少している。しかし、後期終了時に「わからない」という学生が微増したり、「わかる」と回答する学生が微減したりする年も見られる。指を変えながら弾くということが難しいため、奏法としては理解しているものの、それを正しく弾けるかというそうではないということであろうか。なぜこのような回答結果となるのかわからない部分があるため、この同音連打の奏法を使用する際には、奏法名と弾き方を必ず説明し、理解できているかの確認をしていくことを徹底する。

⑩ 装飾音符



装飾音符とは元の音符を飾るためのもので、元の音に小さく付け加えられ、非常に短く弾かなければならない音符のことである。

前期開始時点で「わからない」と回答する学生と「少しわかる」という学生がやや多い。装飾音符が楽譜に書かれているのを目にする機会は多くないことに加え、見たことがあったとしてもそれが装飾音符という名称だと知らない、もしくは名称は知っているがどのように弾けば良いかは知らないという場合がほとんどだからであろう。標準バイエル教則本80番に初めて装飾音符が記譜されており、この課題を終えた学生は装飾音符について理解しているはずである。実際、前期終了時には「わかる」という回答が増えている。しかし、この設問でも後期終了時には「わからない」との回答が増え、「わかる」という回答が減る事象が見られる。なぜなのか。80番以降で装飾音符が付く曲は100番であるが、後期終了までに100番までに到達しない場合、しばらくの間装飾音符を弾いていないこととなり、どのような奏法だったのかを忘れてしまった、あるいは80番に比べると100番の装飾音符は弾くことが難しくなっているため、奏法としては理解しているが上手く弾くことができなかったという意味で「わかる」とは回答できないという理由であろうか。もしもそのようなことが理由であるならば、完全には弾けていなくてもその奏法を理解しているということが重要であるため、その点が伝わるように指導していく必要があるだろう。

装飾音符に限らず、頻回に記譜される奏法ではない場合に、まとめとしてそれまでに学んだ奏法等を改めて確認する時間を設けることを検討する。

まとめ

アンケートの考察を通して、ピアノ奏法において、理論の学習とその実践という両輪で指

導をすることにより効率的に学習を深めることができると考えられる。学習した理論を実際にピアノで弾くことによりさらに実感が伴い、理論とピアノ演奏技術のどちらにおいても定着が期待できるのではないだろうか。よって、音楽理論の進歩をピアノ実技担当教員と共有し、適宜理論の実践を図るといった指導を試みる価値は十分にあると考える。しかしながら、奏法や言葉の意味、そして内容については、まず理解するということが重要であり、それを一言一句間違いなく覚えることや必ず弾けるようになるといったことを目的として授業時間を割くべきではないことを確認しておかなければならない。また、奏法の内容や音楽理論をピアノ実技という授業を通して学ぶことにより定着を図るといった指導には、個々に対応した丁寧な説明、定期的な復習や奏法上の確認も必要である。教員は個別指導時間内での時間配分の見直し等により、より効率が良く質の高い指導内容が常に求められるであろう。

また、設問の意図はより明確に示す必要があり、これは即座に検討し修正すべき点である。設問は内容を正確に捉えることができるよう変更し、設問の取捨選択についても再考すべきだろう。

アンケートについては、より良い授業を行うための学生の忌憚のない声を聞く術のひとつであると同時に、学生自身のピアノ奏法の理解度を知らせかけとなり、また、奏法の実践としてどれだけ自分の身になっているのかを確認する機会となるということはメリットと言えるだろう。アンケートという取り組みを続け、結果を活かし、学生への指導内容の向上を図り、教育・保育の現場における音楽活動の実践に繋げていきたいと考える。

○引用文献

「臨時記号」. 浅香淳. 『標準音楽辞典』第1版. 音楽之友社, 1966 第21刷1983, p. 1388.

○参考文献

厚生労働省 編. 保育所保育指針解説初版. 株式会社フレーベル館, 2018 第5刷2019 ISBN978-4-577-81448-2

文部科学省 編. 幼稚園教育要領解説初版. 株式会社フレーベル館, 2018 第3刷2019 ISBN978-4-577-81447-5

内閣府 文部科学省 厚生労働省 編. 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説初版. 株式会社フレーベル館, 2018 第3刷2019 ISBN978-4-577-81449-9

全音楽譜出版社出版部 編. 標準バイエル教則本・併用曲付. 株式会社全音楽譜出版社, ISBN 978-11-101010-3